こんな大雨に打たれたのはいつぶりだろう。
実際起きた現実とは裏腹に、関係ないことを考える。
もしかしたら人間は耐えがたい事柄が起きた時、本能的に逃げるという行動が備わってるのかもしれない。
僕は土砂降りに打たれながら、空を仰いだ。そしてさっき起きた出来事についてもう一度頭の中で思い出してみる。

今朝、僕は雷の音で目が覚めた。ベッドから起き上がって右側にある窓を見ると、濃い灰色の雲が空を覆っていた。
雷の音で目が覚めるなんて年に数回、いやもしかすると一回だけかもしれないが、大抵最悪な目覚め方をした日は僕にとって良くないことが起きる。朝は晴れていたのに下校時になって雨が降り出すとか、財布を忘れるなど挙げだしたらきりがない。
嫌な予感を胸に抱えたまま、一階にあるリビングに向かう。引き戸を開けると、お母さんがトースターの中にパンを二枚入れている姿が見えた。どうやら朝ごはんを作ってるらしい。
「今日の朝ごはんはベーコンの上に目玉焼き乗ってるよね？」
僕の胸の高さくらいまである木の板で作られたカウンターに肘をつきながら、まだレタスとミニトマトしか乗ってない味気のない大きな白色の皿を指差す。
「ねー、はるくん。今日が何の日か知ってる？」
僕の言葉を無視し、お母さんは僕の顔を見ながらフライパンの上に乗っているベーコンの上に卵を落とす。透明な白身が徐々に白くなっていく。
「……なんかあったっけ」
珍しく上機嫌なお母さんに違和感を感じながら、僕は記憶を辿るように答える。
「もー、五月五日ははるくんの二十歳の誕生日でしょ？　ちゃんと覚えときなさいよ～」
そう言いながらお母さんはフライパンに蓋をした。フライパンの中で油が弾けているのか蓋にパチパチという音がする。
「あー、そうだった。すっかり忘れてた」
ということは、今年度は僕らの代が成人する年か。
そう思うながらリビングに体を向けた時、ハルくんの鳴き声が聞こえないことに気が付いた。
ハルくんとは、家で飼っているハルクインという種類の白と水色の羽が特徴的なインコのこ

とだ。いつもならリビングダイニングに入ってきた時点で声がするのだが、今日は声どころか姿すらない。

「ねえ、お母さん。ハルくんが居ないんだけど」

テレビの横にある鳥籠を覗き込みながら、お母さんに聞く。

「もしかして病院に行ったの？」

これまでにも何度か朝起きた時点で動物病院に連れて行っていることはあったが、お母さんの反応はない。疑問に思い振り返ると、お母さんは黙ったまま流しに置いてある皿を洗っていた。

その瞬間今朝感じた嫌な予感が徐々に心を支配していく。

もしかして、と思うがすぐにその考えを振り払うように首を振る。

そんなわけない。

そう思うも、その『もしかして』を聞かずにはいられなかった。

「……死んだ……とかじゃないよね？」

僕はゆっくりと立ち上がりながら台所に居るお母さんを見る。

長い沈黙のあと、お母さんは小さく頷いた。

そして再び訪れる沈黙。時計の秒針と目玉焼きが焼ける音だけがリビングに響き渡る。丁度パンも焼きあがったのか、場違いな程香ばしい匂いがリビングをより重い空気にさせた。

僕はその空気に耐えきれなくなり、リビングを出て靴を履いて外に出た。

そして今、こうやって誰も居ない住宅街の道の真ん中で霧のような大雨の中一人立っている。

すでに髪は雨水を多く含んでいて、服もズボンもずぶ濡れだ。靴の中にも水がしみ込んでいる。

ハルくんは僕が物心ついた頃には既に飼われていた。鳩やカラスとは違う羽の色をしていたことに幼少期の頃は不思議でたまらなかった。どうしてハルくんは他の鳥さんと色が違うの？と毎日のように両親に聞いては困らせてた気がする。小中高と学年が上がってもハルくんはインコの平均寿命の七年をはるかに超え、二十年生きた。でも、ハルくんは僕の記念すべき日に命日になった。

今までの目覚めの中で一番最悪な出来事だと思った。土砂降りに打たれていたらこの哀しみも洗い流されると思ったが、現実はそう上手くはいかないらしい。

小さくため息をついて、家路を辿った。

家に着くと、頭を締め付けるような頭痛とひどい倦怠感に襲われた。二階に上がる気力はなく、リビングのソファーで横になり天井を見上げる。そのあとすぐに台所の方でお母さんの声が気

がしたが、返事をする前に眠りに落ちてしまった。

＊　＊　＊

「――るくん！　はるくん！」

遠くで誰かが僕の名前を呼ぶ声が聞こえた。

暗闇の中で体操座りをしていた僕はおもむろに立ち上がり、辺りを見渡す。僕を呼ぶ声は体育館のように響き渡り、どこから声がしているのか分からない。歩き出そうとした時後ろから肩を叩かれた。

「やぁーと見つけた！」

振り向くと、中性的な顔立ちをした子が息を切らしながら言った。

少しくせ毛のボーイッシュで、髪色は茶色だった。前髪は右側に額が隠れるくらいに流している。身長は僕より少し低めの一六〇センチくらいで、肘くらいまで隠れている空色のオーバーサイズのTシャツと若芽色（わかめ）のジーンズを履いていた。色白で細い腕がTシャツの中から伸びている。

「もう、あちこち探し回ったんだからね」

小さく頬を膨らませ、腰に手を当てる。あともう少し彼の背が小さく、喉ぼとけが出ていなければ背が高い女の子に間違えられていたに違いない。

「……ごめん」

なんだか申し訳なく思い、僕は謝る。すると彼は表情をコロッと変えて何かを企むような感じで「いいよ、別に気にしてないし」と言いながら歩き出した。

「君ってさ」

数歩先を歩く彼に追いついた時、独り言を言うように呟いた。

「はるくんって呼ばれてるけど、本当の名前はなんて言うの？」

不思議そうな顔で彼は僕の顔を見ながら手を後ろに組む。

「春木（はるき）。季節の春に植物の木で春木」

「へぇー。いい名前だね。誰が付けたの？」

顔を覗き込みながら興味津々に彼は聞く。

「うーん……、多分両親ともが考えて付けてくれたと思うんだけど、どっちかと言うと、お母さ

んかな」
顎に手を当てて僕は続ける。
「誕生日が五月五日で春に生まれたから、そこから春っていう漢字を使って春木っていう名前を付けたんだって」
彼の横顔を見ながら言うと、なるほどね、と言わんばかりの顔をしながら何度も頷いていた。
「君の名前は？　何て言うの？」
僕が顔を覗き込みながら聞くと彼は立ち止まり、目を輝かせながら僕の両手を勢いよく振った。
「僕の名前は陽日（はるひ）。太陽の陽に日の出の日。いい名前でしょ？」
悪戯っぽく言った陽日の顔は、小さい子どものようだった。
うん、と僕は頷く。すると彼は再び嬉しそうな顔で笑う。
ふと視線を上に向けると、いつの間にか僕らの周りは黒から桃色に変わっていた。
「楽しかったよね、あの時」
遠い思い出に耽（ふけ）るように彼は遠い目をしながらゆっくりと歩きだした。僕も彼の歩幅に合わせてゆっくりと歩く。
「ああ、あの時ね」
陽日が言った『あの時』とは僕が中二の時、両親と大喧嘩し自室に引きこもった日の出来事のことだとすぐに分かった。
僕は恥ずかしくなって鼻の下を触る。
「なんであの時僕を春木くんの部屋に連れて行ったりしたの？　僕は二階には上がっちゃいけない約束だったのに」
陽日はそう言いながら立ち止まり、不思議そうな顔をして僕の顔を覗き込んだ。
「だって、あれはお父さんもお母さんもウザかったからだもん。仕方ないよ」
大きく息を吸って溜め息をつく。
「何それ。そんなに僕が必要だったの？」
嘲笑うかのような声で再び僕の顔を覗き込む陽日。
君に僕の何が分かる。
そう思ったはずなのに、出てきた言葉は正反対だった。
「僕は君が必要だったんだよ。生まれた時から双子のように時を過ごしてきて、どんな時も君は

ずっと僕の傍にいて励ましてくれた。なのに、そんな僕の都合で君を独りになんかさせたくなかったんだよ」

気付けば僕はその場にしゃがみ込んで泣いていた。涙で服の裾が濡れていた。

「泣かないでよ」

優しく包み込むような声に僕は思わず顔を上げる。陽日は僕の前にしゃがみ込みの両腕を掴んだ。

「泣くなんて春木くんらしくないよ。春木くんはこうやって」

ほら、と言いながら陽日は僕の口の端を人差し指で軽く押さえ、クイッと口角をあげた。

「笑った方がいいよ。笑顔の方が似合うんだし。ほら、立って」

陽日は立ち上がり、両手を差し伸べた。小刻みに震える手で彼の右手を掴むと、僕の腕を両手で掴んで立ち上がらせた。そして気付けば僕は彼と抱き合っていた。

「温かいね」

耳元で当たり前のことを言う陽日。彼の背中にそっと両腕を当てると、彼は幽霊のように身体が冷たかった。

「因みに聞くんだけどさ」

再び耳元で陽日は囁く。

「僕が居なければどんな名前になってたの？」

なんとも言えない悲しそうな声をしていた。

「分からないよ、そんなの」

この悲しい空気に飲み込まれたくなくて、僕はわざと明るい声を出して笑った。すると陽日は

「なら、僕のおかげだね」と言いながら一歩下がり微笑んだ。彼につられて僕も笑う。

「そう、その笑顔」

曇り空に暖かい太陽の光が差し込むような、そんな笑顔だった。

「辛くなったら空を見て。僕はずっと君のことを見守っているから」

陽日はそう言うとさっきよりも強く、温かく僕を包み込んだ。僕もそれに続いてギュッと力強く彼に抱きついた。

＊　＊　＊

「――るくん！　はるくん！」
今度はお母さんの声で目が覚めた。
ゆっくりと目を開けると、そこにはお母さんとお父さんの心配そうに覗き込んでいる顔が見えた。
「大丈夫？」
お母さんが心配そうに言った。
鈍痛がする頭を抱えながら、僕は起き上がる。眠りに落ちてから三十分しか経ってないかのか、髪はまだ少し濡れていた。でも、先程感じていた倦怠感はなくなっていた。
「立てそうなら、ちょっとテーブルの方に座ってくれないか」
今度はお父さんが口を開く。
ふらつく足でテーブルに座ると、神妙な顔をしてお父さんとお母さんは僕の向かい側に座った。
リビングに響く時計の秒針の音がやけに大きく聞こえる。
「……そういえばはるくんさ」
静かにお母さんが呟く。この妙な空気感に緊張しているのか声が微かに裏返っていた。
「ハルくんがこの家にどんな理由で来たか覚えてる？」
不安そうな目で僕を見る。
「確か、インコを飼い過ぎたとかなんかで知り合いから貰ったんだよね？」
小さい頃にお母さんに言われた記憶を辿る。
「実は、あれ嘘なの」
「……嘘？」
僕は理解が出来なくてお母さんが発した言葉をオウム返しする。
嘘とはどういうことだろう。そもそも知人から貰ってないとかなのかだろうか。でもたったそれだけの為にこうやって面と向かって話をするだろうか。
僕の中で疑問の渦が台風のようにグルグルと巡る。
「お前は、春木は体外受精で授かった命なんだ」
お父さんがため息交じりの声で言った。どこか決意したような雰囲気があった。
「体外受精……って」
まさか、と思った。

その『まさか』は当たっていた。
「一人目も二人目も、ちゃんと私のおなかの中に居たの。でも、気付いたら居なくなっちゃって」
お母さんはへへっと笑顔を作っていたが、今にも泣きそうな顔をしていた。
「でも子どもはどうしても欲しかったから、今考えるとちょっとおかしな話なんだけど『幸せを呼ぶ鳥』っていうことで水色の羽が生えたハルくんをお父さんと話して飼うことにしたの。そしたらその一か月後にはるくんが来てくれて、その時は本当に嬉しかった」
母親の目から涙がこぼれ落ちる。
「それから十か月後にはるくんが生まれて、名前を決めようってなった時にハルくんが来た後に授かった命だから、『ハルくん』の名前と大きな木のようにのびのびと育ってほしいっていう意味で『春木』っていう名前を付けたの。それから病気もせずに順調に育っていって、ハルくんのおかげだなあって思った」
遠くを見る目で言ったお母さんは深く息を吸って続けた。
「でも今朝、ハルくんが倒れててお母さんもお父さんもショックだった。正直、私達も二十年も生きるって思ってなかったから、ここまで生きたのは本当に奇跡だし、春木自身も悲しかったと思う」
お母さんはそう言うと、涙目で僕の目を見つめる。静かにお父さんが口を開いた。
「春木の誕生日に旅立ったのはショックだったと思う。でも、あの日はただのハルくんの命日じゃない。お前の、春木の二十歳の誕生日だ。それはハルくんがお前にあげた最初で最後の誕生日プレゼントなんじゃないのか」
その時、さっき夢の中で出てきた男の子を思い出した。
色白で中性的な顔つき。そして空色の服。会ったことも話したこともない彼と話が通じたわけ。そしてなにより『僕が居なければどんな名前になってたの？』と言ったこと。
何となく彼のその言葉に違和感を持っていた。
でもお母さんとお父さんの話を聞いてパズルのピースがハマったような気がした。
ハルくんが居なくなって哀しみに暮れている僕を励まそうと人間の姿になって現れたのだ。
結局僕は最後の最後まで彼に励まされたのだ。
窓の外を見ると雨が降っていた空はいつの間にかあがっていて、空には大きな虹が架かっていた。

その虹は、『もうはるくんはもう大人なんだから、僕が居なくても大丈夫だよね？』と語りかけているような気がした。